



関東医真菌懇話会 20周年記念誌

1999年6月発行
関東医真菌懇話会

関東医真菌懇話会20周年記念誌刊行を祝して

第1回・第2回世話人：岩田 和夫 東京大学 名誉教授

懇話会事務局の直江史郎教授から20周年記念誌に寄稿するようにとの書状をいただいて、年月の経つことのいかに速いかに今さらのように驚いた次第です。生まれた子供がいつの間にか成人式の年に達したのですから、慶賀の至りです。

本会創設の趣旨は、年1回開催される日本医真菌学会総会では一般演題、シンポジウム等、盛りだくさんで時間的制約のために必ずしも十分な発表・討議をなし得ない憾みがありますから、特定のテーマを少数選び、質疑応答をゆったりと行い、互いに十分意を尽くすようにしたいという希望を実現することになりました。また、関東地域は医真菌学を含む真菌学や関連領域の研究者に多数恵まれているところから、諸問題について多角的に勉強するのに好都合であると考えたのも、この集会を設ける動機でした。そして十分勉強した後は、ささやかな懇親パーティをもってお互いに懇談し、次年の集いを楽しみにするようにしたいと思いました。

この集会が今日まで盛会を続けてきたのは、ひとえに後を継いでくださった世話人諸氏のご尽力に負うところ大きく、また参加者諸氏の斯学に対する高い関心と協力によるものであったことは申すまでもありません。本会の創設に携わった者として記念会開催と記念誌刊行の壮挙に対し心からご祝辞を申し上げるとともに、諸氏に謝意を表したいと思えます。

本会創設に当たって、持田製薬株式会社の当時副社長であった持田 英氏と専務取締役の相沢 登氏を訪ね、会場の借用をお願いしましたところ、快くご承諾くださったのみでなく、社員の方々を会の運営に協力させるとのお申し出をいただいて恐縮したことを、ついこの間のことのように思い出します。さらには懇親会の設営にまでご高配をいただき、それが今日まで続いていることに驚きをすら感じます。この機会に同社および両氏に深甚の謝意を捧げたいと思えます。

医真菌学が、内外の文献を散見しただけでも目覚ましい進展を遂げつつあることを知り喜ばしい限りです。この懇話会がその一環として立派な成果を挙げて行くことを期待してやみません。

本会は今後も永く関東地方の斯学研究者を中心として刻下の重要課題のみならず、日常的な問題についても忌憚なく自由に討議し、情報交換を活発に行う一方、皆さんが年に1回の集いを有意義なものとして、そして楽しく参加して懇親を続けられるよう切望します。本懇話会が、いつまでも、慎ましいなかに充実したものであることを願ってやみません。

第1回

プログラム

世話人：岩田 和夫 明治薬科大学微生物学教室

日時：昭和55年6月21日（土）9：30～17：45

場所：エーザイホール

1. 解説講演(1) 真菌微細構造の電子顕微鏡的解析—方法と写真の読み方／大隅 正子（日本女子大学生物学教室）
 2. 解説講演(2) 深在性真菌症の免疫学的解析／深沢 義村（山梨医科大学微生物学教室）
 3. パネルディスカッション(1) 「抗真菌性化学療法剤の抗菌活性試験法」 司会：山口英世（東京大学医学部細菌学教室）
1. 基礎領域から (1) 山口 英世（東京大学医学部細菌学教室） (2) 宇野 潤（千葉大学生物活性研究所抗生物質研究部）
2. 臨床領域から (1) 内田 勝久（明薬） (2) 高橋 久（帝京大学医学部皮膚科学教室）
 4. パネルディスカッション(2) 「真菌によるアレルギー性疾患とその基盤」 司会：野口義圀（帝京大学医学部皮膚科学教室），信太 隆夫（国立相模原病院内科）
1. 真菌喘息の研究：Candida喘息における発作の季節性に関する検討／月岡 一治（新潟大学医学部第二内科）
2. 農村における気管支喘息と真菌抗原／加藤 英輔（佐久総合病院アレルギー科）
3. 喘息患児のアルテルナリア減感作治療と特異IgG抗体，特異IgE抗体の測定／根本 俊彦（神奈川県立子供医療センターアレルギー科）
4. 真菌アレルギー／油井 泰雄（国立相模原病院アレルギー科）

第2回

プログラム

世話人：岩田 和夫 明治薬科大学微生物学教室

日時：昭和56年5月9日（土）10：00～17：30

場所：ルークホール（持田製薬株式会社本社2階）

解説講演Ⅰ．酵母の分類／曾根田 正己（東京家政大学微生物学教室）

解説講演Ⅱ．家畜および実験動物の真菌感染症／長谷川 篤彦（東京大学農学部家畜内科学教室）

パネルディスカッションⅠ．「肺アスペルギルス症（菌球型）をめぐる諸問題」 司会：沢崎 博次（関東通信病院長）
1. アレルギー型 (1) 米田 良藏（国立療養所東京病院）
(2) 長野 博（聖路加国際病院内科）
2. 菌球型 (1) 平沢 亥佐吉（静岡県立富士見病院外科）
(2) 吉良 枝郎 他（自治医大内科学教室）
(3) 安野 博（結核予防会研究所病院外科）
(4) 田村 静夫（関東通信病院呼吸器科）
3. 肺炎型／沢崎 博次（関東通信病院）
4. 特殊型 (1) 田村 静夫（関東通信病院呼吸器科）
(2) 近藤 有好（新潟大学医学部内科学教室）
(3) 中村 智次，発地 雅夫（信州大学医学部病理学教室）

パネルディスカッションⅡ．「深在性真菌症の治療上の問題点」 司会：池本 秀雄（順天堂大学医学部内科学教室），岩田 和夫（明治薬科大学微生物学教室）
1. 基礎領域／岩田 和夫
2. 内科領域／池本 秀雄，渡辺 一功，伊藤 章（横浜市立大学医学部内科学教室）
3. 皮膚科領域／香川 三郎（東京医科歯科大学皮膚科学教室）

第3回

プログラム

世話人：香川 三郎 東京医科歯科大学医学部皮膚科学教室

日時：昭和57年5月8日（土）13：00～17：00

場所：ルークホール（持田製薬株式会社本社2階）

一般演題 1. *M. gypseum*による白癬性毛瘡の1例／香川 三郎（東医歯大・皮） 2. *M. gypseum*と*T. rubrum*との連続感染による指爪白癬の1例／岩重 毅（昭和大・皮） 3. SLEに併発した白癬菌性肉芽腫の1例／西山 千秋（日大・皮） 4. カンジダ性毛瘡の1例／馬場 安紀子，折原 俊夫，古谷 達孝（独協大・皮），荒川 智美（同・共同研究室） 5. 黒色分芽菌症の1例／佐藤 壮彦，松田 和子（山梨県立中央・皮） 6. アスペルギルス肺炎病巣の電顕的考察／森 健，浜本 恒男，日比野 順子，椎名 和彦，泉 昭，渡辺 一功，池本 秀雄（順天大・内） 7. 肺アスペルギロームのMiconazole治験の経過報告／浜本 恒男，日比野 順子，椎名 和彦，泉 昭，森 健，渡辺 一功，池本 秀雄（順天大・内） 8. 実験的コクシディオイデス症／宮治 誠，西村 和子（千葉大・生物活性研），Libero Ajello（Centers for Disease Control）

解説講演 角膜真菌症／石橋 康久（筑波大・眼）

パネルディスカッション「抗真菌剤のMIC測定に関する問題点」 1. 平谷 民雄（帝京大・植物） 2. 三上 襄（千葉大・生物活性研） 3. 楠 俊雄（日医大・皮）

関東医真菌懇話会20周年記念に寄せて

第3回世話人：香川 三郎 昭和大学医学部皮膚科

関東医真菌懇話会が平成11年6月に20周年を迎えるそうで、月日の経つのは速いようにも思えるし、やっと20年になるのかという気もする。ところで、第20回で事務局の労をとられる直江史郎先生から、私が世話人を務めた頃の状況や思い出を書けと言われてみると、それは第3回 昭和57(1982)年のことであり、16年前の記憶などはすっかり霞んで心許ない限りである。しかし、直江先生から当時のプログラムのコピーまで送られてきてみると、何か書かなければならない羽目となった。それで記憶違いなどはお赦しいただくことにする。

関東医真菌懇話会(当時は関東地方医真菌学懇話会となっていたようだ)が当時の日本医真菌学会理事長岩田和夫先生の肝煎りで発足したのは昭和55(1980)年6月であった。日本医真菌学会が発足したのは昭和32(1957)年であったが、その後昭和35年頃(?)から、九州地区をはじめとして関西、神奈川、北陸などの各地に、医真菌の懇談会や懇話会が次々と誕生した。

これらの会に共通する特徴として、いずれも皮膚科の真菌学者が主催し、その運営方針も学会という堅苦しい雰囲気をもたせず、何でも自由に発言して本音で気楽に物が言える会であること、また真菌に興味をもちたいという若い人達や初心の人にも進んで症例報告をしてもらい、学会発表をする際の助言、指導を気安く行うなどして、真菌症に対する興味をもってもらい、医真菌学会への入会者を増やすなど、斯道奨励を図ることにあった。これは会を設立した当時のスタッフの考えであり、現在でもその線に沿った運営が行われていると私はみている。

ところで、関東医真菌懇話会はこれまでの懇談会・懇話会とはやや性格が異なって発足したようである。それは本会を始められた岩田先生の考えが別の所にあったためであろう。先生は日本医真菌学会が年1回しか開催されないことを不十分と考え、年にもう1回総会に準じるような会を開きたいご意向を漏らされた記憶がある。しかし、医真菌学会の貧乏所帯を遣り繰りしていた財務担当理事の私としては財政的に実現不可能であった。それで当時関東地区内には神奈川医真菌談話会があったのであるが、これとは別に関東地方医真菌懇話会を発足され、自ら第1回、第2回の世話人を買って出られたわけであろう。当時のプログラムを見てもわかるように、一般演題を募集せず、解説講演とパネルディスカッションのみとし、新しい疾患や研究の解説、種々の問題点についての意見の発表と討論を時間をかけてじっくりと行えるように企画されている。つまり、関東医真菌懇話会は初めから学会として運営され、日本医真菌学会の補足的学会と見做すことができよう。

第3回は岩田先生のご命令で私が世話人となったが、参加者を多くする狙いもあって、一般演題を募集することにした。当時のプログラムを見ると、一般演題が8題集まり、演説時間各8分、討論2分となっており、かなり余裕があったようである。また解説講演は筑波大眼科の石橋康久先生に、当時まだ珍しかった「角膜真菌症」についてお願いした。パネルディスカッションは、「抗真菌剤のMIC測定に関する問題点」と題し、平谷民雄(帝京大・植物)、三上 襄(千葉大・生物活性研)、楠 俊雄(日医大・皮膚)の3先生に講演・討議をお願いしている。

以上、関東医真菌懇話会発足当初の頃の状況を、私の朧気な記憶の中から引き出してみたが、思い違いなどもあるかと思う。岩田先生も寄稿されることと思うので、発会の趣旨など先生から直接伺えると思っている。本会のますますの発展を祈る次第である。

プログラム

世話人：池本 秀雄 順天堂大学医学部内科

日時：昭和58年5月28日（土）10：30～17：10

場所：ルークホール（持田製薬株式会社本社2階）

一般演題 1. *Exophiala*属の分類について／岩津 都希雄（成田赤十字病院皮膚科），西村和子，宮治 誠（千葉大学生物活性研究所病原真菌研究部） 2. *Histoplasma capsulatum*菌体抽出物のマウス脾臓リンパ球幼弱化阻止作用／○神宮 茂司，山本 容正，岩田 和夫（明治薬科大学微生物学） 3. イミダゾール系抗真菌剤作用機作の特徴／○山口 英世，平谷 民雄（帝京大学医学部微生物学），岩田 和夫，山本 容正（明治薬科大学微生物学） 4. 白癬菌の性刺激反応の研究／○高橋 久，金子 修（帝京大学医学部皮膚科），長谷川 篤彦（東京大学農学部） 5. 皮膚糸状菌の重複感染について／岩重 毅，新村 陽子，福留 恵子（昭和大学医学部皮膚科） 6. 肺アスペルギロームの血清学的診断／○浜本 恒男（順天堂大学医学部内科），橘 みどり（同共同細菌）

パネルディスカッション「真菌菌株保存法について」 司会：岩田 和夫（明治薬科大学微生物学） イントロダクション／岩田 和夫（明治薬科大学微生物学） 1. 酵母株の保存について／曾根田 正己（東京家政大学微生物学） 2. 継代培養を主とした子のう菌，不完全菌など一般糸状菌類の保存／宇田川 俊一（国立衛生試験所真菌室） 3. 酵母・糸状菌の保存—細菌との比較において／山田 和彦（味の素（株）中央研究所微生物化学研究部） 4. 放線菌属の保存法 (1) 嫌気性放線菌，(2) 好気性放線菌／松前 昭広（北里大学・北里衛生科学専門学院） 5. 病原真菌，とくに病原性の保持について／宮治 誠（千葉大学生物活性研究所）

シンポジウム「深在性真菌症の治療—その問題点」 司会：池本 秀雄（順天堂大学医学部内科） イントロダクション／池本 秀雄（順天堂大学医学部内科） 1. 深在性カンジダ症／森 健（順天堂大学医学部内科） 2. クリプトコックス髄膜（脳）炎／伊藤 章（横浜市立大学医学部第一内科） 3. 肺アスペルギローム／渡辺 一功（順天堂大学医学部科） 4. スポロトリコーシスおよびクロモミコーシス／中嶋 弘（横浜市立大学医学部皮膚科）

混合感染とは

第4回世話人：池本 秀雄 順天堂大学 名誉教授

懇話会という名が示すように、本会は皆がかみしもを脱ぎ、演者にたっぷり時間を差し上げ、気楽に意見交換できるようにと企画された同好の士の集いである。テーマにはその時その時の話題や問題点が取り上げられてきたものと思う。

さて、私がお世話させていただいた第4回懇話会の思い出話を記すようにとのご要請であるが、15年以上も前のことでもあるし、それに前後して毎回出席したこともあって、それぞれの記憶が重なり、うまく分離できないというのが本音である。この点はお許し願いたい。

第4回懇話会のプログラムを改めて眺め、まず心に浮かぶのは岩重 毅先生（昭和大学医学部皮膚科）が一般演題の部でお話しになった「皮膚糸状菌の重複感染について」である。このお話のなかで同先生がご紹介してくださった1943年、Lewisらの考え方に、当時の私は深い興味を覚えた。

すなわちLewisらが多重（multiple）真菌感染を、1)連続（consecutive）感染、2)同時（concurrent）感染ならびに3)混合（combined）感染の3つに分類したことである（邦訳は一部私見による）。かねがね“混合感染”とはそもそも何だろうかと考えていただけに、かかる分類法を聞かされてはっとした。もっとも、表（浅）在性真菌症ではこれらが鑑別できたとしても、深在性真菌症で明確に区分するのは大変なことだと同時に感じた。

周知の通り、1950年Holmは放線菌の病巣や菌塊から主起炎菌である放線菌のほか、諸好気性・嫌気性菌を同時に分離し、後者を“associates”とよんだ。動物実験でもこれらが病巣形成に協同的役割を果たすことを確かめた。1952年Brisouは菌交代症、1954年Weinstein, Lらは重（複）感染（superinfection）なる新語を提唱し、今日これらの言葉は定着している。混合感染の機序をラットを用いて一層明らかにしたのは1974～75年、Weinstein, W. M.らであり、大腸菌による急性腹膜炎期と、これに続く*Bacteriodes fragilis*による腹腔内膿瘍形成期を観察し、これを二相性疾患（biphasic disease, two-stage disease）と称した。このほかにも同類の研究はたくさんあるに違いない。

そこで、深在性真菌症にもこれらに似たような事象がありはしないかということである。真菌と細菌、まれには真菌同士による単一病変などの存在である。事実、膿胸において胸水から*Aspergillus fumigatus*のような真菌と、細菌とくに無芽胞嫌気性菌が同時に分離され、両者の化学療法を順次行って（原則は細菌を先に）、初めて治癒に至るケースが経験される。深部壊死巣や膿瘍においても真菌と細菌が同時に分離されることがある。それぞれの微生物の果たす役割は如何なものであろうか。多重感染を考えると、結局は“混合感染”とはそもそも何かという疑問に回り回って帰着する。大げさに言えば永遠のテーマかもしれないが。

懇話会で得られた一部の知識に私見を交えて考察するという、いささか偏った印象記になったことをお詫びする。

この十数年間に医真菌学は目覚ましい進歩を遂げたが、本会がますます発展し、斯界に新風を吹き込むことを願うものである。

プログラム

世話人：新井 正 千葉大学生物活性研究所

日時：昭和59年5月31日（木）9：30～17：30

場所：ルークホール（持田製薬株式会社本社2階）

一般演題 座長：池本 秀雄（順天堂大・医・内科） 1. 医真菌学用語上の2,3の問題点／
○岩田 和夫（明治薬大・微生物） 2. 浴槽水および浴室排水口の真菌フローラ
(1) *Exophiala*属／○西村 和子, 宮治 誠, 田口 英昭, 田中 玲子（千葉大・活性研）
3. 急性白血病に併発した気管アスペルギルス症／○森 健, 浜本 恒男, 日比野 順子,
泉 昭, 渡辺 一功, 池本 秀雄（順天堂大・医・内科）, 富田 倫代（順天堂大・医・
膠原病内科）, 石岡 知憲, 福田 芳郎（順天堂大・医・病理） 4. 多内分泌腺腫瘍第1
型に併発した遅発性慢性皮膚粘膜カンジダ症の1例／○佐々木 哲雄（大船共済病院）,
黒沢 伝枝, 中嶋 弘（横浜市大・医・皮膚科）, 神永 陽一郎（横浜市大・医・中研）
解説講演 座長：新井 正（千葉大・活性研）

黒色真菌研究の現状／宮治 誠（千葉大・活性研）

国際学会報告 座長：岩田 和夫（明治薬大・微生物）

第1回国際生物活性シンポジウム “Filamentous microorganisms-current topics of infection,
toxicosis and control” を開催して／新井 正（千葉大・活性研）

パネルディスカッションⅠ. 「真菌の化学分類」 司会：駒形 和男（東大・応微研） 1.
病原性酵母の多糖類の¹H-NMRスペクトルとその分類同定への応用／篠田 孝子（明治
薬大・微生物） 2. 菌類のキノンと系統／倉石 衍（東京農工大・農） 3. 放線菌の化学分
類／三上 襄（千葉大・活性研） 4. *Debaryomyces hansenii*及び関連酵母の分類—伝統的分
類と化学分類—／中瀬 崇（理研・微生物系統保存施設）

パネルディスカッションⅡ. 「実験的真菌感染モデル, とくに真菌症化学療法との関連に
おいて」 司会：岩田 和夫（明治薬大・微生物） 1. 真菌感染巣の経時的推移について—
特に肺感染を中心に—／発地 雅夫（信州大・医） 2. 抗生物質処置マウスにおける
*C. albicans*の経口感染と抗真菌剤の評価／横井山 繁行（東洋醸造・医薬研）, 吉武 豊（同・
安全性研） 3. ラットにおける実験的腫カンジダ症／皆川 治重（協和発酵・医薬研） 4.
実験的皮膚真菌症と化学療法／俵 勝也（塩野義製薬研）

予定発言 実験的皮膚糸状菌感染実験上の問題点／山本 容正（明治薬大・微生物）

随想

第5回世話人：新井 正 千葉大学 名誉教授

このたび関東医真菌懇話会20周年に際し、改めて筆者がお世話した第5回懇話会のプログラムを眺めて、15年間の時の流れの速さと、時代による学問の変貌の激しさに驚かざるを得ない。当時の講演について筆者の衰えた記憶によって意見を述べ誤りでもあれば誠に申し訳ないので、筆者の関与した国際学会報告「第1回国際生物活性シンポジウム“Filamentous Microorganism-current topics of infection, toxicosis and control”を開催して」と、プログラムのパネルディスカッション「真菌の化学分類」についての感懐を述べることにしたい。

まず国際生物活性シンポジウムであるが、このシンポジウムは1946年千葉医科大学に設置された腐敗研究所が1973年生物活性研究所に改組されてから10年を経過したことを記念して開催された。腐敗研究所はもともと戦後の逼迫した食糧事情を改善するために設立されたものであったが、当然食品の変敗に関わる真菌やマイコトキシンも重要な研究課題になっていた。生物活性研究所に改組されて医真菌分野も一層重要性を増してきた。

この国際シンポジウムでまず第1部は重要な医真菌の系統発生に関し、クラミドスポアアの意義や*Coelomycetes*真菌、*Aspergillus*や*Penicillium*を含む*Trichomaceae*科真菌、病原性黒色真菌ならびに好熱性真菌、耐熱性真菌の分類学について報告された。第2部では病原放線菌の分類学、同定、放線菌の特異な色素生成、ストレプトマイセスによる β -ラクタマーゼの産生などが討議され、第3部食品汚染の真菌とマイコトキシンのセッションでは人の生活と関わりのある真菌の分類学や生態学、新しいマイコトキシン Fumitremorgin やその作用メカニズム等が論議された。第4部は真菌感染のメカニズムに関する議題で、非特異的、特異的な宿主防禦機構、真菌感染の病理組織学、病原真菌の高分子毒素などが報告された。第5部は抗真菌化学療法の基礎と臨床に関し、アムフォテリシンBの新しい生物活性として免疫増強効果の紹介や、新たに開発されたイミダゾール抗真菌剤の作用メカニズムと臨床効果が内外の研究者によって報告された。

その後1987年、千葉大学生物活性研究所は真核微生物研究センターに、さらに1997年真菌医学研究センターと、10年時限という法制上の制約から目まぐるしく改組が行われてきたが、しだいに医真菌学に関する国際研究機関としてその地歩を固めつつある。筆者は1985～94年日本学術会議会員となったが、学術会議の微生物学研究連絡委員会は永らくわが国に菌学研究所を設立することを要望し続けたが実現をみていない。わが国の多くの大学付置の共同利用研究所は学術会議の勧告によって設立されてきたが、最近では新規提案の研究所の実現は極めて困難となりつつある。千葉大学の真菌医学研究センターが姿を変えて長年の菌学者の夢を実現する総合研究所として完成されればこれに代わるものとして大変すばらしいことと思われる。

さらにこの懇話会で話題になった「真菌の化学分類」はBruns (1992年) による18SリボソームRNA塩基配列に基づく系統解析の報告に触発され、分子系統分類学として革命的な進歩を遂げつつある。Ainsworthの分類体系が根本的に再編成され、菌の同定法も一変しつつあることは目を見張らせるものがある。

それにつけてもこの懇話会が果たした20年の貢献を振り返ってみて、これを創始された岩田和夫東大名誉教授の功績に深い敬意を表したい。

プログラム

世話人：澤崎 博次 関東通信病院

日時：昭和60年6月8日（土）10：00～16：00

場所：ルークホール（持田製薬株式会社本社2階）

解説講演 座長：岩田 和夫（明治薬大） 1. マイコトキシン研究の現状と将来／倉田 浩（国立衛生試験所） 2. 酵母の新分類について— Kreger-van Rij：The Yeasts（3rd Revised and Enlarged Edition）を中心に／後藤 昭二（山梨大学工学部醗酵化学研究施設）

国際学会報告ならびに予告 1. IXth International Congress of ISHAM／宮治 誠（千葉大・生物活性研） 2. International Symposium on the In Vitro and In Vivo Evaluation of Antifungal Agents／岩田 和夫（明治薬大）

一般演題 座長：池本 秀雄（順天大・内科） 1. *Aspergillus*菌球，菌塊と肺アスペルギロム患者血清との沈降反応／森 健，村松 万喜子，磯沼 浩，浜本 恒男，渡辺 一功，池本 秀雄（順天大・感染症内科） 2. 腎移植と真菌症／宮治 誠（千葉大・活性研），落合 武徳（千葉大・第2外科） 3. 白血病の経過中に川崎病の症状を呈し，カンジダ症で死亡した一剖検例／渋谷 和俊，安藤 充利，浅地 聡，跡部 俊彦，直江 史郎（東邦大・大橋病院・病理），田村 鉦二（東邦大・医・第二病理），佐地 勉，月本 一郎（東邦大・医・小児科），村田 久雄（東邦大・医・公衆衛生） 4. 糖尿病に合併した肺アスペルギロムの喀血死の一例／田村 静夫，熊崎 智司，續木 信明，鶴沢 毅（関東通信・呼吸器科），小峯 慎吾，太田 明夫（関東通信・代謝内科），末松 直美（関東通信・病理）

シンポジウム「臨床各科から見た真菌症」 座長：澤崎 博次（関東通信） 1. 食道カンジダ症／伊藤慎芳（関東通信・消化器内科） 2. 心臓弁膜置換術後の合併症／仁礼 隆（東京女子医大・心研内科），高見沢 邦武（東京女子医大・心研小児科） 3. 頭蓋骨アスペルギルス症／益沢 秀明（関東通信・脳神経外科），杉本 弘行（都立荏原・脳外科） 4. 腎移植後の真菌合併症／真下 節夫（北里大・泌尿器科）

第6回関東地方医真菌学懇話会を振り返って

第6回世話人：澤崎 博次 関東通信病院 元院長

第6回関東地方医真菌学懇話会（昭和60年、1985年）のプログラムを前にして当時を思い返してみた。

昭和60年といえば私はすでに現役を退き、研究から遠ざかっていたが、アスペルギルス症の臨床研究を呼吸器以外にも拡げたいと思い、脳外科、腎移植の先生方にもお願いした。幸いにして参会者も多く盛会で、懇親会も賑やかでお役目は果たした思いだった。

さて、保存資料の中から珍しい手紙が出てきた。第2回（昭和56年、1981年）世話人の岩田和夫先生からお話があり、パネルディスカッション「肺アスペルギルス症（菌球型）をめぐる諸問題」を担当したのだった。当時、私は菌球型肺アスペルギルス症の研究に夢中で、医真菌学会を含め屡々成果を発表してきていた。

そこで今回は、典型的な新しい症例やHypersensitivityの症例をも加え、より広い領域の観点から多くの先生方に論陣を展開していただいた。延々2時間の大講演会となり、懇話会後の先生方の評判も大変よろしく、内容を単行本にまとめたらとのアドバイスもいただいた。そこで演者の先生方へのお礼の手紙の中にも録音テープの校正のお願いなど資料の用意も含めたのであった。

その後も私はグロコット染色標本でアスペルギルス菌体を徹底的に追究した。かなりの知見が得られたので、前回用意の資料と併せてようやく1冊の単行本にまとめることができた。それが、『肺アスペルギルス症（菌球型を中心に）』（澤崎編著、1984年、医学書院）となったわけである。本書は発刊後14年経った今でも肺アスペルギルス症研究の参考書としての価値は失っておらず、ご協力いただいた多くの先生方に改めてお礼を申し上げたいと思う。

ルークホールと私

第7回世話人：宮治 誠 千葉大学真菌医学研究センター 教授

昭和56年、第2回関東医真菌懇話会（当時の名称は関東地方医真菌学懇話会）が岩田和夫先生（明治薬科大学微生物学教室教授、東京大学名誉教授）を世話人として初めてルークホールで開催されたのがルークホールと私との長いつき合いの始まりでした。四谷駅からわずか5分の持田製薬（株）の2階にある同ホールは定員100人前後、小規模ながらよくまとまっていて、きわめて家庭的な雰囲気をかもし出しており、以来毎年関東医真菌懇話会が同ホールで開催され現在に至ってます（2、3度同ホール改築等のため、ほかの施設を使用したと思います）。

さて昭和60年の第6回懇話会終了後、岩田先生から突如翌年から私に事務局をやるように、とのお話をいただきました。諸先輩を差し置いて若輩の私が、と何度も辞退申し上げたが、至らぬ点は私（岩田先生）がサポートするとの強いご意志のもと、とうとう事務局を引き受けることになりました。内心困ったことになった、と悩んでいましたが、世の中はわからぬもの、このおかげで私は持田製薬の懇話会担当者の方々と親しくなることかでき、これによって私達の研究施設が生き延びることができたのです。当時の中曽根内閣は行政改革の旗印のもと、無用な(?)あるいは研究成果の上がらぬ組織は取りつぶせとの目標を掲げ、文部省もこれに積極的に取り組んでいました。しかし私達は大学の自治が最優先されていた国立の大学組織は絶対につぶれない、との幻想を抱いていました。ところがそのまさか、の事態がわれわれの研究施設に起こってしまったのです。その間いろいろありましたがとにかく昭和62年、われわれの研究施設は真核微生物研究センターとして、再編成、再出発することができ、私が初代センター長としてこの脆弱な組織の舵取りをしなければならない羽目になりました。

このセンターに課せられた目的の一つは「国際化」です。私をはじめとして職員一同大いに戸惑ったことは想像できると思われれます。国際化の手段の一つに国際シンポジウムがあります。お金も人脈も乏しいわれわれでしたが、とにかく毎年開催しなければならない、そのとき、担当者であられた布沢さんがルークホールの使用と部下の方々の協力を申し出てくれたのでした。まさに地獄に仏で、以後関東医真菌懇話会と真核微生物研究センターの国際シンポジウムを毎年開催することができました。以後担当者は布沢さんから高口さんに引き継がれていきましたが、協力態勢は変わらず、おかげで平成2年の第11回懇話会まで無事事務局としての務めを果たすことができたのです。今年（平成11年）この会も20回を迎えようとしており、これはルークホールなしには難しいことだったと思われれます。現在ルークホールの名を聞くたびに懐かしさとともに心が和み、持田製薬のこれまでのご協力に心より感謝する次第です。

プログラム

世話人：宮治 誠 千葉大学生物活性研究所

日時：昭和61年5月10日（日）10：00～17：00

場所：ルークホール（持田製薬株式会社本社2階）

特別講演1 座長：山口 英世（帝京大・医真菌センター）

抗真菌剤に対する超微形態学的影響／大隅 正子（日本女子大・生物）

特別講演2 座長：古谷 航平（三共株式会社・発酵研）

魚病と真菌症／畑井 喜司雄（日本獣医畜産大・獣医）

一般演題 座長：高橋 久（帝京大・医・皮膚科） 1. *Trichophyton violaceum*による体部白癬の1例／比留間 政太郎、久木田 淳（防衛医大・皮膚科） 2. 皮膚アルテルナリア症の1例／岩津 都希雄（千葉大・活性研・病原真菌） 3. *Candida albicans*多糖体の薬理学的ならびに化学的特性／飯島 肇，村田 久雄（東邦大・医・公衆衛生） 4. 実験的マウス *Candida albicans*感染に対する多糖類の防御機構における食細胞の役割／大川 喜男，鈴木光，鈴木 茂生*，鈴木 益子（東北薬大・微生物，* 同・第二衛生化学） 5. *Candida albicans* NIH A - 207およびNIH B - 792株糸状菌型菌体ホスホマンナン-タンパク質複合体の免疫化学的性質／柴田 信之，深沢 茂之，小林 秀光，東城 峰弘，鈴木 茂生（東北薬大・第二衛生化学）

シンポジウム「真菌の危険度分類とその取り扱い方」 司会：宮治 誠（千大・活性研・病原真菌） 1. 病原性酵母を中心にして／加賀谷 けい子（山梨医大・微生物） 2. 病原性糸状菌を中心にして／西村 和子（千大・活性研・病原真菌） 3. 病原性放線菌を中心にして／三上 襄（千大・活性研・抗生物質） 4. 病理よりみた真菌の危険度分類／久米光（北里大・医・病理） 5. 臨床よりみた真菌の危険度分類／中嶋 弘（横浜市大・医・皮膚科） 6. マイコトキシン研究者よりみた真菌のバイオハザード／一戸 正勝（国衛試・衛生微生物） 7. 抗真菌剤検定実験におけるバイオハザード／山口 英世（帝京大・医真菌センター）

プログラム

世話人：直江 史郎 東邦大学医学部大橋病院病理部

日時：昭和62年5月9日（土）10：00～17：00

場所：ルークホール（持田製薬株式会社本社2階）

一般演題 座長：渡辺 一功（順天堂大学医学部感染症内科） 1. 再生不良性貧血に合併したヒストプラズマ症の一例検例／田中 菊枝，亀田 典章，秋間 道夫，福永 昇（東邦大学医学部第一病理学教室），渋谷 和俊，直江 史郎（同大橋病院病理部），平野 盛久（同第一内科） 2. 急性骨髄性白血病に続発した全身性*Trichosporon beigeli*感染症の一例検例／山本 憲一，久米 光，奥平 雅彦（北里大学医学部病理学教室） 3. 大動脈弁置換術後に発症した*Scedosporium apiospermum*（臨床報告）／吉野 秀朗，茅野 真男（足利赤十字病院循環器科），西川 邦，大蔵 幹彦（同心臓血管外科），峯 徹，竹中 信夫（同脳神経外科），青木 阪（同中検細菌室），山口 英世（帝京大学医真菌研究センター） 4. 宮脇 修一（済生会前橋病院内科） 座長：西川 武二（慶応大学医学部皮膚科学教室） 5. 原発性皮膚クリプトコックス症の1例／大畑 弘幸，比留間 政太郎，久木田 淳（防衛医科大学校医学部皮膚科学教室） 6. 白癬性肉芽腫の1例／黒沢 傳枝，高橋 泰英，中嶋 弘（横浜市立大学医学部皮膚科学教室），宮本 秀明（平塚共済病院皮膚科） 7. 南米土壌からの病原真菌の分離／西村 和子，宮治 誠，田口 英昭，田中 玲子（千葉大学生物活性研究所病原真菌研究部） 座長：宮治 誠（千葉大学生物活性研究所） 8. 病原酵母分離用培地の改良及びその応用／山口 英世，内田 勝久，山本 哲郎，洞沢 明子（帝京大学医真菌研究センター） 9. 妊産婦における酵母状真菌フローラの検索／岩瀬 一（西新井病院産婦人科），穂垣 正暢（帝京大学医学部産婦人科学教室），山口 英世，竹重 厚子，内田 勝久（帝京大学医真菌研究センター） 10. 膣真菌症の難治性要因に関する研究／片桐 伸之，平吹 知雄，茂田 博行，柳沢 隆，並木 俊始（横浜南共済病院産婦人科），内田 勝久，山口 英世（帝京大学医真菌研究センター）

特別講演 座長：倉田 浩（総合防菌研究所）

感染症と毒素／竹田 美文教授（東京大学医科学研究所）

シンポジウム「医真菌学研究における今後の展望」 座長：奥平 雅彦（北里大学医学部病理学教室） 1. 肺真菌症の動物モデル作成／久米 光（北里大学医学部病理学教室） 2. *C. albicans*による血管炎作成実験／村田 久雄（東邦大学医学部公衆衛生学教室） 指定発言：病理学的観点から，／跡部 俊彦（東邦大学大橋病院病理部） 3. 眼科領域における今後の展望／石橋 康久（筑波大学医学部眼科学教室） 4. 皮膚糸状菌産生のケラチナーゼについて／桶口 道生（昭和大学藤が丘病院皮膚科） 5. 皮膚真菌症の発症機序に関する一考察／高橋 久（帝京大学医学部皮膚科学教室） 6. 真菌によるアレルギー性肺疾患／秋山 一夫（関東中央病院内科） 7. 抗真菌剤研究の現状と将来／山口 英世（帝京大学医学部真菌研究センター）

第8回の本懇話会を担当した当時の記憶から…

第8回世話人：直江 史郎 東邦大学医学部大橋病院病理学講座 教授

本懇話会が発足して比較的早い時期の第8回をアレンジするようにと山口教授より依頼された時に戸惑いがあったものの、今になるとプログラムを組むときの細かい経緯はほとんど忘れてしまった。ただ、私は真菌のもつ生物活性物質や毒素としての働きの有無などについて興味をもち始めた頃であった。その理由は、私どもの大学の村田久雄先生が開発した実験、つまり川崎病患児の糞便から得た*Candida albicans*のアルカリ菌体抽出物をマウスの腹腔内に投与すると激しい冠状動脈炎をはじめとする系統的動脈炎が起こり、その組織像や分布が川崎病の変化に類似しているという実験が、私の専門である川崎病の研究に利用できるのではないかと考えていたからである。この実験系をみると、真菌という微生物をこれまでのような感染ないしmycotoxinの観点とは異なる方向からも考えられることが興味深かった。そこで、微生物のもつ生物活性物質や毒素に対してどのような考えをしていく必要があるのか教えを乞うために、倉田先生を通じて、細菌毒素のスペシャリストであり、日の出の勢いにあった竹田美文教授に「感染症と毒素」と題する特別講演をお願いした。その内容の詳細はすでに記憶していないが、示唆に富む刺激的なご講演で、現在でも私どもが実験を行ううえで役立っていることがいくつかある。

シンポジウムは、医真菌学のほぼ全領域にわたるもので、多少盛りだくさんだったように思えるものであった。しかし、奥平先生の選択はさすがで、その後におけるそれぞれの領域の発展は目を見張るものがあり、今さらながら、先を見る確かな目をおもちになっていることを感じ、先生がこの医真菌学の先達であったことを改めて感じさせられた。

一般演題も珍しい*Trichosporon beigelii*, *Scedosporium apiospermum*, *Histoplasma*などの例や、菌種は比較的一般的ながら病型が特殊な例など、かなりまれな症例が発表された。「南米の土壌からの病原真菌の分離」の研究が後に素晴らしい発展をしたことは、衆目の認めるところである。また、現在私どもは日常細胞診業務のなかで、膣カンジダ症の迅速診断さらにはその治療へのアドバイスを形態的な面から積極的に行い、それに関する論文もいくつか出しているが、その基本となる考え方をもつことができたのは帝京大グループからの「婦人科領域と真菌の研究」発表によるところが大きい。

今から振り返って見ると、結果的には恩師の奥平、倉田両先生の力添えで本会を開催することができ、小生自身のその後にとっても極めて有意義な会を受け持たせていただいた感が強く、ご推薦くださった山口教授に感謝している。

この回想文を書きつつ改めて第8回当時を振り返ると、現在活発な学会活動をしている渋谷助教授は、山口・内田の両先生の教育を受けて帰室して間もない頃であり、また本懇話会でシンポジストも務めた若山講師が入室して数年目であった。村田先生が残した*C. albicans*によるマウス冠状動脈炎の実験系は、もう一人の助教授である高橋と大原関助手に受け継がれて川崎病の実験モデルとして確立され、さまざまな面から検討が行われて面白い展開をしている。第8回を受け持って以来12年という時間の早さを今さらながら実感している。

私は生来勉強が嫌いで、太陽の下で運動ばかりしていた。インターンのときに同僚から、「お前、本当に医学部を卒業して来たのか？何を聞かれても知らないではないか」と言われてショックだったが、そのような状態ながらも国家試験を通過した。せめて大学院の期間だけでも学生時代の遅れを取り戻し、それから臨床に行こうと思い、クラブの顧問が病理の教授であったことや、学生時代からお世話になってきた奥平先生の勧めもあって病理学を選んだ。学問など全く縁がないと思っていた自分が、学者の端くれとして身を立てるようになるとは思ってもいなかったし、人生の面白さを今さらながら感じている昨今である。

プログラム

世話人：發地 雅夫 信州大学医学部第二病理学教室

日時：昭和63年5月7日（土）10：15～17：00

場所：ルークホール（持田製薬株式会社本社2階）

一般演題 座長：山口 英世（東大・応微研） 1. *Paracoccidioides brasiliensis*の二形性の観察／佐野 文子，計良 恵治，マルセロ・デ・フランコ，西村 和子，竹尾 漢治，宮治誠（千葉大・真核微生物研） 2. Purification and characterization of extracellular proteinase of *Hendersonula toruloidea*／Viboon Rojanavanich，吉池 高志，坪井 良治，高森 健二，小川 秀興（順天堂大・医・皮膚科） 3. Itraconazole内服により治癒した内因性真菌性眼内炎の1例／石橋 康久，渡辺 亮子，本村 幸子（筑波大・医・眼科） 4. 皮膚アルテルナリア症／岡 吉郎（長岡日赤・皮膚科） 座長：久米 光（北里大・医・病理） 5. 血清中 *Aspergillus fumigatus*抗体に関する研究—知見補遺／小原 共雄（順天堂大・医・内科） 6. カンジダ感染と虚血性疾患の関連性／村田 久雄*，矢部 喜正**，飯島 肇***（*東邦大・医・公衆衛生，**東邦大・医・循環器診断センター，*** S.R.L.試験研究部） 7. 医原性と考えられる全身性カンジダ症の1剖検例／加藤 匡志，伊藤 誠，發地 雅夫（信州大・医・第2病理） 8. 混合性結合組織病（MCTD）に合併した深在性真菌症の1剖検例／成家 庄二，稲葉 鋭，發地 雅夫（信州大・医・第2病理）

パネルディスカッション「生活環境の真菌—とくに真菌症との関係について」 司会：宇田川 俊一（国立衛生試験所） 1. 土壌生息菌／古谷 航平（三共醗酵研究所） 2. 植物病原菌／堀江 博道（東京都農業試験場） 3. 室内環境菌／西村 和子（千葉大・真核微生物研）

シンポジウム「皮膚深在性真菌症最近のトピックス」 司会：西川 武二（慶応大・医・皮膚科） 1. 白癬性肉芽腫の病変形成に果たすプロテアーゼの役割／関口 かおる（日大・医・皮膚科） 2. 皮膚スポトリコーシスの温熱療法についての最近の知見／比留間 政太郎（防衛医大・皮膚科） 3. 黒色真菌感染症における2,3の問題点／仲 彌（慶応大・医・皮膚科） 4. 皮膚真菌症における外用ステロイド剤の影響／中嶋 弘（横浜市大・医・皮膚科）

信州の人間が「関東」医真菌懇話会を主催して

第9回世話人：發地 雅夫 信州大学医学部第二病理学教室 教授

関東医真菌懇話会が発足してから20回を迎えるということで、まことに感慨深いものがある。小生は、この会が当時の明治薬科大学 岩田和夫教授の呼びかけによってスタートしたときから参加させていただいている者の一人である。

岩田先生の趣意書を読み返してみると、いわゆる学会総会と違って、十分時間をかけて細かいところまで話し合うことが謳ってある。また、当時は一般演題は募集しないことになっていて、会の名称も「関東地方医真菌学懇話会」ということで、「地方」と「学」が入っており、この名称が第11回まで続いていた。

この会が定期的で開催されるようになり、いつの間にか小生も幹事の一人に加えられた。パネルディスカッションやシンポジウムにも参加し、なかには、その内容が書物になったものもあり、確かに実のある会であるという実感をもっている。

小生は信州に住み、いわゆる甲信越というのが地理的な所属である。幹事会その他で、第9回の本会を主催するように要請されたときは、場違いではないかと申し上げたのを覚えている。

世話人の仕事は、会の主催とプログラミングであるから、私なりに工夫してプログラムを作った。一般演題は8題あり、症例と研究的な演題が半々くらいで、それぞれ面白く、活発な討論をいただいたように記憶している。午後は、生活環境の真菌を扱ったパネルを宇田川俊一先生に企画していただき、皮膚の深在性真菌症に関するシンポジウムを西川武二先生にお願いし、それぞれ新しい事実がたくさん報告され、かつ十分な討論がなされた。

信州の住人が東京で会を主催するのであるから、受け付けなどを含めて若干の人が必要になる。教室の女性を含めて数人が上京することになり、前の晩は同じホテルに泊まった。ミニ教室旅行のようなもので、その晩は一杯飲み、馴れない東京の街に繰り出した。

当時、すでにこの会も型ができていたように思われるが、持田製薬のお世話になっていた。産学共同というより、持田製薬の後援によるところ大であった。小生も当時、関東というほどの単位ではないが、信州自体でもこのような会をもちたいと考えていた。懇親会の席で、当時この会の世話をしておられた学術情報部ロコルナル推進室の布沢健夫課長にそんなことを話したのがきっかけとなって、信州でも同様の会をもつことになった。昭和63年、同じ年の秋に第1回信州「日和見」感染懇話会を持田製薬のお世話で開催してから、こちらも11回になる。信州では、真菌だけではやや範囲が狭いということから、「日和見」感染とし、まだシンポジウムを組むほどには到っていないが、なかなか興味深い一般演題と、毎年違った特別講演を楽しんでいる。「関東医真菌懇話会」の思いがけない余得ということができる。

東京を中心とした関東一円には研究者も多いので、100人前後を対象としたこのような会は開きやすく、今後も期待される。発足の趣旨にもあったように、幅広い研究者が集まり、十分な発表と討論を通して深く学ぶことはきわめて意義深いことと考える。発会の頃若手だった小生などが、ぼつぼつ年配者に入った今日、次々と若手が登場して活発な会を続けていかれることを期待するものである。

プログラム

世話人：山口 英世 帝京大学医真菌研究センター 教授

日時：平成元年6月3日（土）10：00～17：00

場所：ルークホール（持田製薬株式会社本社2階）

一般演題 座長：宮治 誠（千葉大学真核微生物研究センター） 1. スポロトリコーシスー特異な臨床像を呈した症例ー／高瀬 孝子，上野 賢一（筑波大学臨床医学系皮膚科学教室）
2. 肺扁平上皮癌に併発したアスペルギルス膿胸の一例／内藤 隆志（筑波メディカルセンター病院），村山 淳一，佐藤 浩昭，陶山 時彦，福田 潔，本間 敏明，佐藤 哲夫，矢野 平一，大塚 盛男，吉澤 靖之，長谷川 鎮雄（筑波大学付属病院呼吸器内科）

特別講演 座長：山口 英世（帝京大学医真菌研究センター）

肺クリプトコックス症の臨床像と新しい治療の試み／河野 茂（長崎大学医学部第二内科学教室）

ワークショップ「カンジダ症の血清学的並びに血液生化学的診断法」司会：池本 秀雄（順天堂大学医学部内科学教室），篠田 孝子（明治薬科大学微生物学教室） 1. 抗原検出系におけるラテックス凝集反応／久米 光（北里大学医学部病理学教室） 2. Avidin-Biotin-Amplified Enzyme-Linked Immunosorbent Assay (AB-ELISA) を用いた抗原検出による深在性カンジダ症の診断／鈴木 宏（千葉大学医学部小児科学教室） 3. *Candida albicans*の分泌性acid proteaseを利用した診断法の検討／吉野谷 定美（東京大学医学部臨床検査医学講座），山本 哲郎（宝酒造株式会社酒類食品研究所）

予定発言 1. カンジダ症におけるLatex凝集反応と*Candida* HAテストについて／稲垣 正義（順天堂大学医学部内科学教室・感染症） 2. カンジダ症における血中抗体のELISA法による検出／羽山 正義（信州大学医学部第二病理学教室） 3. 血液疾患に合併したカンジダ症診断における抗カンジダ抗体価の評価／高木 宏治（九州大学医学部第一内科教室） 4. カプトガニ血液凝固系を用いた深在性真菌感染症の診断／池邨 勝美（大阪大学医学部救急医学講座） 5. 深在性カンジダ症とD-アラビニトール／浜田（曾田）浩吉（京都府立医科大学臨床検査医学講座）

一味違う情報交換

第11回世話人：長谷川 篤彦 東京大学農学部獣医内科学教室 教授

第11回懇話会をお世話するように依頼され、承諾はしたもののどうしようかと考えたのが昨日のこのように思われる。しかし不思議なことにどのような会を催したのか確かな記憶はない。準備の大半は持田製薬のスタッフの方々が滞りなく処置してくださった。教室にも何度か打ち合わせのためお訪ねいただき、相談というか無理なお願いをしたようであった。

前回の第10回懇話会を担当された山口英世教授がポスターを作成され、広く宣伝されたとのことで、前例にならいポスターを印刷して各分野の先生方に送付し周知方をお願いした。その結果のためか、前年に劣らない参加者もあって当番を引き受けたものとして安堵した覚えがある。

さて第11回研究会の内容であるが、午前中に一般演題として6題の講演が行われた。クロモミコーシスの症例報告が2題、膈外陰真菌症の背景因子の問題と、角膜真菌症の治験が各1題、およびクリプトコックス症が2題である。

引き続き田淵 清教授（麻布大学獣医学部）をお招きして「獣医領域におけるプロトテカ症とデルマトフィルス症」の演題で特別講演をお願いした。プロトテカ症は牛では主に乳房炎、イヌでは播種性感染を呈するものが多く、ネコや鹿などでは皮膚型感染を起こすことが紹介された。疫学的には樹液、糞便、廃水処理槽、淡水、海水などに広く分布していることが示された。また牛の乳房炎、各種動物での創傷皮膚感染、抵抗力減弱動物においては経口感染もみられることがある。日本でも淡路島、神奈川県、北海道で牛の乳房炎の発生が認められていることが強調された。

一方デルマトフィルス症についてはヒトにも感染する細菌性疾患であるが、古くから放線菌同様真菌研究者が取り扱ってきた微生物によることから興味ある問題が多数紹介された。起因菌は *Dermatophilus congolensis* で膿疱、糜爛を呈し膿痂疹を形成する表在性の皮膚感染症で、牛、緬羊のほか、馬、鹿、豚、犬、猫などで報告されている。本菌は偏性寄生性菌とされ、接触感染、有棘植物や吸血昆虫などによって伝播されるほか、雨露に濡れた皮膚面では遊走子によっても蔓延する。動物から動物へ、また動物からヒトへの感染も知られている。アフリカ大陸を中心に、ヨーロッパ、中東、インド、オセアニア、南北アメリカからの報告がある。日本でも沖縄県で、牛での自然感染例が認められている。以上の内容はこれまで日本ではあまり注目されていない分野の情報であって参考になったものと思われる。

午後は15分間の休憩を挟んで4時間以上に及び「クリプトコックス症—その基礎と臨床—」という題名でワークショップを行った。座長は渡辺一功教授（順天堂大）と西村和子教授（千葉大）をお願いした。西村先生の緒言に始まり、獣医学領域から後藤直彰教授（東大農学部）、病理学領域からは渋谷和俊博士（東邦大）、血清学領域から池田玲子博士（明治薬大）、内科学領域から伊藤 章助教授（横浜市大）、皮膚科学領域から高瀬孝子博士（筑波大）の各先生方にそれぞれの立場における現状と問題点について解説していただき、お考えを開陳していただいた。また渡辺先生に総括していただいた。総合討論では診断や治療の問題をはじめ、基礎疾患についても討議された。また脳病変の形成については、ヒトでは、肺原発巣から血行的に脳に至るとされているが、ネコの場合には鼻腔から骨融解を伴い直接的に病巣が波及することが示された。

Cryptococcus neoformans は自然界にも広く分布し、本菌感染症も日和見感染症としての意義が大であることから免疫不全状態である患者の治療に際しては十分な注意が必要であり、また当然のことながら早期診断によって早期の適切な対応が重要であることが強調された。

恐らく一味違った情報交換の場となったものと思っている。